

チヨースーの『郷土の話』における“illusioun”

柴田竹夫

I

チヨースー (Geoffrey Chaucer, ?1340-1400) の『カンタベリー物語』 (*The Canterbury Tales*) における『郷土の話』 (“The Franklin’s Tale”) (以下 FranT と記す)¹⁾ は、1390年代中ば頃の作と推定されている。Arveragus なる騎士 (knight)、その妻 Dorigen, そして Aurelius なる騎士の従者 (squier) の三者を巡る Breton lays (“a brief narrative poem with an idealized, romantic content”) と呼ばれる romance である。

Arveragus と Dorigen の結婚においては、結婚における支配権 (‘soveraynetee’) の問題が、二人の関係を論じるに当たり基本的事項としてある。更に Dorigen と Arveragus 及び Dorigen と Aurelius の関係を論じるに当たっては、“trouthe”²⁾ の問題が控えている。

これら二つの問題を踏まえた上で、romance としての FranT の解釈を試みたい。

II

まずは FranT における支配権と愛の関わりについて考察する。Arveragus がいかにして Dorigen を妻に迎え入れたのか。見目麗しく (“the faireste under sonne,” 734)、家柄も良い (“so heigh kyndrede,”

735) Dorigen に惚れて、騎士として様々に手を尽くし愛の苦悩 (“his wo, his peyne, and his distresse,” 737) を告白するのに骨を折る。この様に騎士が恋の骨折りをするのは courtly love の基本事項の一つである。

Dorigen は結局 Arveragus との結婚を承諾する。それというのも彼が若くて陽気な騎士としての「立派さ」 (“worthynesse,” 738; 1091-93)³⁾ と彼女に対する柔和な服従 (“meke obeysaunce,” 739) の態度を示した故、恋に苦しむ男に「憐れみ」 (“a pitee,” 740)⁴⁾ を覚えたからである。Dorigen は彼を夫 (“housbonde,” 742) とし、主人 (“lord,” 742) とすることに同意する。憐れみは courtly love におけるすぐれた美徳の一つである。

FranT における courtly love には、女が結婚に際し、一つの条件を提示するという特徴が見られる。それは何かというと、夫が妻に対して持つのと同じ「権力」 (“lordshipe,” 743) を妻にも認めるという条件である。こうした女の提示した条件を騎士が受け入れるのも、結婚生活をより幸福な (“in bliss,” 744) ものにするためと Arveragus が考えるからであり、だからこそ彼の方から自ら進んで (“of his free wyl,” 745) その受け入れを次の様に誓ったものである。

That nevere in al his lyf he, day ne nyght,
Ne sholde upon hym take no maistrie
Agayn hir wyl, ne kithe hire jalousie,
But hire obeye, and folwe hyr wyl in al,
As any lovere to his lady shal,
Save that the name of soveraynetee,
That wolde he have for shame of his degree. (746-752)

(1)妻の意思に反して夫の支配 (“maistrie,” 747) を振り回さないこと、

(2)妻に対して嫉妬しないこと (748)、そして(3)夫は妻の意思に服すことと
いうのは、愛の成就のため女に対する男の側の大幅な譲歩と考えられるが、
この二人の間で注目すべきことは、騎士・夫・主人としての対面を汚さな
いように「支配権」(“the name of soveraynetee,” 751) を保とうとす
ることである。

Thus hath she take hir servant and hir lord-
Servant in love, and lord in marriage.
Thanne was he bothe in lordshipe and servage.
Servage? Nay, but in lordshipe above,
Sith he hath bothe his lady and his love;
His lady, certes, and his wyf also,
The which that lawe of love acordeth to. (792-798)

先程結婚において「権力」を夫と妻が対等に持つという女の要求する結
婚の条件を、男が受け入れたが、ここで明らかになった様に、騎士の対面
の点から、男が女に支配権を持つというのはどういうことかと言うと、そ
れは夫が妻に対して結婚における支配権を有するが、実質は、互いに対等
の権力を有することを意味している。

courtly love において、男の “gentillesse,” (754)⁵⁾ に基づいて、男
の束縛からの自由 (“so large a reyne,” 755) という先程指摘した男か
らの3点の譲歩を女が認識し、それほどまでに自分を受け入れてくれるが
故に女も男を受け入れる気持ちになったわけである。

Sire, I wol be youre humble trwe wyf-
Have heer my trouthe-til that myn herte breste. (758-759)

ここに見られる結婚における夫の妻への譲歩や夫の妻に対する支配権の

問題は、幸福な結婚生活を送るために (802; 804)、双方の合意に基づくものである。しかしそれは何が何でも女を手に入れんがための男の側の譲歩ではなくて、語り手が “Love wol nat been constreyned by maistrie.” (764) というように、支配権 (maistrye) と愛 (love) の関わりを男も女も承知した上でのことである。

男が女を支配しようとする、愛の神は飛び去る。なぜならば愛は自由な精神である (“Love is a thing as any spirit free,” 767) からだと語り手は言う。男も女も自由 (liberte) を求め、奴隷 (thral) のように拘束されることは望まない。立派な騎士 Arveragus は、幸福な結婚生活を送るためには愛と支配権との緊張関係を理解した上で。自由な愛の精神とそれに基づく支配権 (騎士・夫・主人としての対面を汚さないほどの) を求めている。更に妻との愛を育むには courtly love における美德の一つである「忍耐」 (“paciencie,” 773; “pacienc in love,” 771; “temperance,” 785) をもってあたることも二人は心得る。かくして Arveragus と Dorigen は、実際的かつ理想的な結婚の約束を交わす。

And therefore hath this wise, worthy knight,
To lyve in ese, suffrance hire bihight,
And she to hym ful wisly gan to swere
That nevere sholde ther be defaute in here. (787-790)

それではこの二人の幸福な結婚を成り立たせているのは一体何か。妻は “humble trewe wyf” (758) であり、“trouthe” (759) を示す。夫共々妻は “an humble, wys accord” (791) を取り結ぶ。夫も妻も控えめである。夫は “worthynesse” (738)、“gentillesse” (754) を示し、立派な騎士と見える。つまり二人の美德なのである。

この二人の結婚における夫に対する態度には、二つの異なる側面がある。一つは結婚において妻が夫を主人と認め、騎士としての対面を汚さないた

めの支配権を夫が持つことを許しており、夫もこうした条件を認める。“lord in marriage” (793) としての夫の位置付けである。二つは、愛における僕 (“servant in love,” 793) として夫が妻に仕えるという面である。

こうした結婚に対する “lordshipe” と “servage” (794) の二点を夫に求める妻の態度、そしてそれを受け入れる夫の態度 (servant in love, lord in marriage) の両面が結婚において同時に成り立つことが、語り手の言う幸福な結婚の条件なのである。

かくして優れた性格を有する夫と妻が、「愛と支配権」の関わりを承知した上で、実際的で理想的な婚姻関係を結び、幸福な結婚生活を送るのである。

III

次に Dorigen と Aurelius 及び Dorigen と Arveragus との人間関係を考察する。ここでは FranT に頻出する “trouthe” という言葉が a key word として働いている。

幸福な結婚生活を一年以上続けた後、妻を一人家に残し Arveragus は騎士の修行に出かける (811)。こうした騎士として “worshipe” (=good reputation) と “honour” を求める行為は、騎士として当然の行為である。一方夫の帰りを首を長くして待つ Dorigen は、夫を想い、憂鬱と悲嘆にくれる。

She moorneth, waketh, wayleth, fasteth, pleyneth;
Desir of his presence hire so destreyneth
That al this wyde world she sette at noght.
Hire friends, whiche that knewe hir hevy thoght, (819-822)

こうした Dorigen だが、親切な友人たちの慰めによって少しずつ悲しみも薄らぐ。Arveragus も早く家に帰るつもりだという手紙を妻に送る(結局 2 年後に帰宅)。

ある春の朝、友人は家の近くの立派な庭園⁶⁾に Dorigen を連れてゆく。春の楽しい庭園で彼女は、Venus の僕 (937) である若い騎士の従者 Aurelius と知り合い、言葉を交わすようになる。語り手は Aurelius を次の様に描写する。

That fresher was and jolyer of array,
As to my doom, than is the month of May.
He syngeth, daunceth, passynge any man
That is, or was, sith that the world bigan.
Therwith he was, if men sholde hym discryve,
Oon of the beste farynge man on lyve;
Yong, strong, right virtuous, and riche, and wys,
And wel beloved, and holden in greet prys. (927-934)

Aurelius は Arveragus に引けをとらないくらい立派な男として描かれている。

実は、Aurelius は二年以上前から Dorigen に想いを寄せていた (934) が、Arveragus 同様なかなか自分の想いを伝えられず、ただ一人悶々としていたのである。

But langwisshesth as a furye dooth in helle;
And dye he moste, he seyde, as dide Ekko
For Narcisus, that dorste nat telle hir wo. (950-952)

しかし彼女と知り合った後は、その想いを彼女に切々と訴える。そして

苦悩に「憐れみ」(“mercy,” 974; 978) をかけてくれなければ彼を殺すことになってしまうと彼女に強く迫る。

Madame, reweth upon my peynes smerte;
For with a word ye may me sleen or save.
Heere at youre feet God wolde that I were grave!
I ne have as now no leyser moore to seye;
Have mercy, sweete, or ye wol do me deye! (974-978)

この積極的な求愛にも関わらず、不義の妻 (“untrewe wyf in word ne werk,” 984-5) になることを Dorigen は当初強く拒む。ところがどうしたことか Aurelius の申し出を断固拒否した Dorigen だったが「戯れに」 (“in pleye,” 988) 次の様に Aurelius に言う。

“Aurelie,” quod she, “by heighe God above,
Yet wolde I graunte yow to been youre love,
Syn I yow se so pitously complayne.
Looke what day that endelong Britayne
Ye remoeve alle the rokkes, stoon by stoon,
That they ne lette ship ne boot to goon --
I seye, whan ye han maad the coost so clene
Of rokkes that ther nys no stoon ysene,
Thanne wol I love yow best of any man;
Have heer my trouthe, in al that evere I kan.” (989-998)

勿論無理難題の提示というのは中世ロマンスに見られる常套ではあるが、ここでは様々な解釈の可能性を含ませていると考えられる。

男に無理難題を吹っかけて求愛を断念させるつもりであったのか

(1001; 1005)、⁷⁾あるいは切々と訴えかける Aurelius にふと憐れみをかけてしまったからなのか。あるいは愛の庭園において Venus の僕たる Aurelius の求愛に答えて、まさに「戯れに」言ったのか。いずれにせよ Dorigen は “Have here my trouthe” というおのが戯れの言葉に以後束縛されることになる。

Mercy に訴えかける男に対し Dorigen は、春の庭園において Venus の僕 (937) である Aurelius の求愛を受け入れるかのような言葉を吐く (989-991)。この時 mercy の訴えに mercy を返すという美德を示す Dorigen の姿と考えられるのも、Arveragus による mercy を求める求愛の時、mercy を返して (740)、彼を受け入れた Dorigen であったからである。

Dorigen の途方もない返事に対して、Aurelius は悲嘆にくれてこう言う。

“Madame,” quod he, “this were an impossible!

Thanne moot I dye of sodeyn deth horrible.” (1009-1010)

そこで Aurelius はどうしたかということ、太陽の神 Phoebus と月と海の神に憐れみを請い、「奇跡」(“miracle,” 1056) をと祈る。ここで奇跡とは満潮によって2年間海岸の岩を水面下に置くようにすること (1058-62; 1065) である。太陽の神に憐れみを請うた (1079) 後、気を失って倒れる (1080)。Dorigen も窮地に追い込まれた時深い悲しみから気を失う (1349) のと同様に Aurelius の悲しみの深さを聴衆は知ることになる。

Aurelius の奇跡の祈りはかなえられる結果となる。彼は奇術師 (“maistres,” 1220) を探し出し、彼と千ポンドの報酬で海岸の岩をすべて取り去る「約束」を交わす。

This bargain is ful dryve, for we been knyht.

Ye shal be payed trewely, by my trouthe!' (1230-1231)

かくして 神神そして奇術師の力によって Aurelius は恋の苦しみから救われる。海岸の岩がすべて消えているのを見て (1295-6)、Dorigen のもとにむかい、彼女に対して彼は “trouthe” に掛けて訴えかける。

But certes outhere moste I dye or pleyne;
Ye sle me giltelees for verray peyne.
But of my deeth thogh that ye have no routhe,
Avyseth yow, for thike God above,
Er ye me sleen by cause that I yow love. (1317-1322)

Aurelius は自らの生死をかけて彼との約束 (“trouthe”) を守るよう彼女に強く迫る。

But in a gardyn yond, at swich a place,
Ye woot right wel what ye bihighten me;
And in myn hand youre trouthe plighthen ye
To love me best—God woot, ye seyde so,
Al be that I unworthy am therto. (1326-1330)

Dooth as yow list; have youre biheste in mynde, (1335)

Dorigen がもし Aurelius との約束を守るとすると、騎士の妻として不義をなすことになり、もし彼との約束を守らなければ、“trouthe” を反故にすることになるという窮地に Dorigen は陥る。

Dorigen は運命の女神にわが身の不運を嘆く (1355-66)。彼女が不義 (“untrewe”) を避けるには、死か不名誉のいずれかを選択するしかない。

結局肉体の恥辱 (shame) つまり名誉を汚す (“lose my name”) よりは死を選ぶことを強く望む。そこで Dorigen は自らの考えを裏打ちするために過去の歴史における、恥辱よりは死を選んだ女たちの例を89行に渡り列挙する (1367-1456)。

ここに見られる Dorigen と Aurelius の “trouthe” を巡る葛藤は、最終的には Dorigen が “trouthe” を守る結果に終わる。

自らの名誉を守ることを強く望む Dorigen ではあったが、妻同様名誉の葛藤に呻吟する夫の意を受け入れて、Aurelius との約束を交わした庭園に向かう (1504-5) が、途中で当の本人の Aurelius と出会う。

“Unto the gardyn, as myn housbonde bad,
My trouthe for to holde—allas, allas!” (1512-1513)

Aurelius は Dorigen が彼との約束 (“trouthe”) を守るためにやって来たというのを聞いて、彼女の葛藤の苦しみ (lamentation, distresse, 1528) に大いに同情 (greet compassioun, 1515)⁸⁾ する、そして妻に約束 (“trouthe,” 1531) を守るように命令した立派な (his greet gentillesse, 1527) 騎士に対しても (1517) 大いなる同情を覚える。この「同情」は Aurelius の示す美德の一つである。

Aurelius gan wondren on this cas.
And in his herte hadde greet compassioun
Of hire and of hire lamentacioun,
And of Arveragus, the worthy knight,
So looth hym was his wyf sholde breke hir trouthe;
And in his herte he caughte of this greet routhe, (1514-1520)

騎士の従者 Aurelius は更なる「憐れみ」の美德を Dorigen に見せる。

彼女に対し約束遂行を迫ることも出来るのに、彼女と Arveragus の間の愛を裂くよりも、自分の “lust” を思い止めたいと思うようになる。Aurelius の立派な態度である。

Considerynge the beste on every side,
That fro his lust yet were hym levere abyde
That doon so heigh a cherlyssh wrecchednesse
Agayns franchise and alle gentillesse; (1521-1524)

終には Aurelius は愛の庭園で交わした Dorigen との「約束」を取り消すことを約束する。

My trouthe I plighte, I shal yow never repreve
Of no biheste, and here I take my leve,
As of the treweste and the beste wyf
That evere yet I knew in al my lyf.
But every wyf be war of hire biheeste! (1537-1541)

自らのふるまいが立派な行為 (gentil dede, 1543) であることを Aurelius は自覚した上でのことである。

Dorigen に関して掛かった金銭の面からも Aurelius の “trouthe” が見える。

Aurelius は奇術師 (philosopher, 1561) に千ポンドの報酬を約束したが、その支払いに窮し奇術師の「慈悲」(grace) にすぎる (1566)。今まで約束を破ったことがないと訴えつつ、少しずつでも返してあくまでも約束を守ることを表明する。

My trouthe wol I kepe, I wol nat lye. (1570)

Aurelius は事の一部始終を奇術師に話す。

He seide, “Arveragus, of gentillesse,
Hadde levere dye in sorwe and in distresse
Than that his wyf were of hir trouthe fals.”
How looth hire was to been a wikked wyf,
And that she levere had lost that day hir lyf,
And that hir trouthe she swoor thurgh innocence, (1595-1601)

Aurelius は Dorigen と Arveragus のことは一言も悪く言うことはない。自分との約束も彼女の無邪気さによる (“through innocence,” 1601) ものと Dorigen をかばう姿勢を見せる。Arveragus が気前良く (freely, 1604) 妻を自分の元に寄こしたことに對して、自分も “freely” (1605) に彼の妻を彼の元に返したと “freely” であることの証明を自らする。Aurelius に対し奇術師は、Aurelius のふるまいも Arveragus のふるまいも共に立派な (gentilly, 1608) ものであることを認め、更に Arveragus の支払うべき千ポンドの支払いを取り消し、出してくれた食費だけで十分だと言う。この様に金銭の面からは Aurelius の “trouthe” ばかりでなく奇術師の “grace” の美徳も伺える。

続いて Dorigen と Arvetragus の人間関係を見ていこう。肉体を汚すよりは死を選ぶという固い決意を抱く Dorigen に対して夫の Arveragus は涙を流す。妻の説明を聞き終わると夫としてこう命令する。

“Ye, wyf,” quod he, “lat slepen that is stille.
It may be wel, paraventure, yet to day.
Ye shul youre trouthe holden, by my fay!
For God so wisly have mercy upon me,
I hadde wel levere ystiked for to be

For verray love which that I to yow have,
 But if ye sholde youre trouthe kepe and save.
 Trouthe is the hyeste thing that man may kepe”-
 But with that word he brast anon to wepe,
 And seyde, “I yow forbade, up peyne of deeth,
 That nevere, whil thee lasteth lyf ne breeth,
 To no wight telle thou of this aventure-
 As I may best, I wol my wo endure-
 Ne make no contenance of hevynesse-
 That folk of yow may demen harm or gesse.” (1472-1486)

彼は言う。約束は厳守せねばならない (1474; 1478; 1479) そして妻の辱めによる悲しみは耐え忍ぶと言って、「忍耐」の美德を打ち出す。Arveragus は Dorigen の堅い決意にもかかわらず「約束」(“trouthe”) を守ることを第一と考える。Arveragus としては、夫としての支配権の行使、それも夫としての体面を思っでの決断と考えられる。さらには妻の辱めは二人が黙っていれば、他人にはわからないとの現実的な判断が働く結果によるのかもしれない (cf.1481-6)。いずれにしても Arveragus は “trouthe” の美德を尊重する態度を明確にする。

Aurelius の立派な行為 (Dorigen との約束を破棄すること) に対して、死と不名誉の両方を避けることが出来た Dorigen は、Aurelius に感謝し (1545)、Arveragus も大変満足する (1548)。かくして Dorigen と夫 Arveragus は、夫は妻を “queene” の様に慈しみ、妻も夫に “trewe” (1555) であり続けるという両者共に幸福な生活を送る結果となる。

Dorigen と Aurelius の人間関係及び Dorigen と Arveragus の人間関係を分析してみると、“trouthe” の美德を中心にして FranT は展開し、そして virtues の連鎖 (Dorigen→Arveragus→Aurelius→奇術師) が起きていることがわかる。

IV

続いて FranT における “illusioun” の働きについて考察する。Aurelius の恋の病が救われたのは奇術師の “illusioun”⁹⁾ によってである。ここではこの “illusioun” の視点から FranT を見てみよう。

2 年以上も哀れな (wretch) 状況にあって一人苦しみに耐えていた Aurelius も、彼の苦しみを唯一知る兄の手により恋の苦しみから救われることになるのだが、それは奇術師の奇術 (“illusioun”) によってであった。

For hooly chirches faith in oure bilene
Ne suffreth noon illusioun us to greve. (1133-1134)

Aurelius の兄は、キリスト教会の信仰としてはいかなる “illusioun” (1134) も我々を害してはいけないと断りつつも、様々な幻 (“apparences,” 1140) を二人の前で見せつけた奇術師 (tragetoures, 1141; magicien, 1184) の手を借りてでも弟の恋の病を直す決心をする。

“My brother shal be warissed hastily
For I am siker that ther be sciences
By whiche men make diverse apparrences,
Swiche as thise subtile tregetoures pleye.
For ofte at feestes have I wel herd seye
That tregetoures withinne an halle large
Have maad come in a water and barge,
And in the halle rowen up and doun. (1138-1145)

語り手が “a supersticious cursedenesse” (1272) と呼ぶ奇術だが、

敬虔なキリスト教徒なら頼らないであろう “illusioun”¹⁰⁾ に弟を思う兄は頼るのである。

Aurelius は奇術師の家に行くと、そこで “illusioun” を見せ付けられる。

And whan this maister that this magyk wroughte
Saugh it was tyme, he clapte his handes two
And farewell! Al oure revel was ago.
And yet remoeved they nevere out of the hous,
Whil they saugh al this sighte merveillous,
But in his studie, ther as his bookes be,
The seten stille, and no wight but they thre. (1202-1208)

奇術師が言うには、“apparences” (1140;1157;1602), “illusioun” (1134; 1264; 1292) によって、海岸の岩をすべて見えなくし、Dorigen が約束を果たさざるをえなくさせてしまうというのだ。

海岸の岩は確かに全て姿を消したが、それは満潮を続かせることによるわけで、実際になくなったわけではなく（見かけの上だけで）、満潮が去れば岩は再びその姿を現すことになる。ところが Dorigen が Aurelius に対して岩を消したならばと言うのは、それは文字通り岩が実際に消滅することを意味している。Aurelius はこの言葉の意味における食い違いを捉えたのである。ここに Dorigen にとって言葉の意味と実際の出来事との食い違いが起こる。

Dorigen にとって奇術師の起こす “illusioun” とは、時の経過と共にまさに変わるものでもあるにも関わらず、現実の世界では大きな束縛の力を持つ。つまり見かけ上の変化するものに対する言葉の意味するところの食い違いによって窮地に追い込まれてしまった、つまり自らの言葉で陥穽に陥って (“in swich a trappe,” 1341) しまったのである。

それでは Aurelius にとっての “illusioun” とはいかなるものであろうか。恋の病を癒してくれる「奇跡」(“miracle”) としてそれはある。Dorigen の言葉の意味の食い違いを捉え、海岸の岩がすべて見えなくなるのも束の間のものであって、再び岩が姿を見せること、つまりは現実世界での「変わるもの」としての “illusioun” がまさに変化の中で現れることを、彼は理解している。

それでは Arveragus にとって “illusioun” とはいかなる意味を持っているのであろうか。彼にとって最も重要なことは、騎士として「約束」を守ることであって、“illusioun” や奇術師についての言及は一切無い。

次に FranT における “illusioun” の働きを考察する。奇術師が海岸の岩を消し去る事のように「不可能なもの」が「可能なもの」になりうる現実(真実ではないが)を示している。Dorigen と Arveragus がのっぴきならない状況に追い込まれたときに見せる二人の美德は、そういう状況設定だからこそ聴衆に際立って見えるものである。つまり FrakT における “trouthe” の美德を、この “illusioun” は際立たせる働きを成しているのである。

V

“Arveragus は、妻 Dorigen の考える、不義を避けるために恥辱よりは死という選択よりは、妻の恥辱よりは約束を守る事の方が大事と考える。しかしこれは夫の支配権を振り回さないという当初の約束に反してはいないか。

そうではなくて Dorigen が夫の悲しみを汲み、夫の騎士としての対面を保たんが為に Arveragus の意思に従ったものと考えられる。Arveragus の “trouthe” を尊重する態度の現れである。

Dorigen は、夫への愛を守り、“trewe” であり続け、自らの “trouthe” を守り通すわけである。Aurelius と奇術師の二人も Dorigen と

Arveragus の示す “trouthe” の態度を受けて、やはり “trouthe” の態度を示す。美德の連鎖である。

不安定で移ろいやすい人間の現実世界にあって「変わらぬもの」としての “trouthe” は、「変わるもの」としての “illusioun” が見せる以上の大きな力を聴衆に見せる。

岩を消す “illusioun” とは、この世界が無常であること、そして Dorigen に見る人間が “trappe” にはまる可能性を具現化している。だが無常の人間世界にあって人間は、“trouthe” を初めとして様々な美德 (virtues) を示す可能性を見せている。

結局 Chaucer は FrankT において、人間の現実世界にはほころびをもたらすものとしての “illusioun” を通して人間の “trouthe” を描いていると考えられる。

注

- 1) 原文引用はすべて Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer, 3rd Edition* (Boston: Houghton Mifflin, 1987) による。本文中数字は行数を現す。
- 2) “treuth,” MED1. (a) : Fidelity to one’s country, kin, friends, etc.; also, genuine friendship; also, faithfulness (初例 1258年) ; MED2. (a) : A promise (初例 ?a1160年) ; MED3. (a) : Honor, integrity; adherence to one’s plighted word; also, nobility of character, knightly honor, adherence to the chivalric ideal (初例 c1275年) ; MED4. (a) : Honesty in the conduct of one’s business, work, etc. (初例 c1390年) .
- 3) “worthiness,” OED1: The character or quality of being worthy, in various senses (初例1340年).
- 4) “pite,” MED2. (a) : A feeling of pity aroused by the suffering, distress, grief, etc., of another, sympathy, commiseration; MED2. (b) : cacchen (taken)? of, to take pity on (初例 c1300年、FranT l. 740引例) ; MED2. (e) : A cause or ground for pity, grievous event or act (初例 c1325年、c1395年 FranT l. 1431引例).
- 5) “gentillesse,” MED1. (a) : Nobilty of birth or rank (初例1340年 ; MED2.

- (a): Nobility of character or manners; generocity, kindness, gentleness, graciousness, etc.; also, good breeding (初例 c1330年) ; MED2. (b) : A noble or gracious action (初例 a1385年、FranT l. 1608引例).
- 6) L. D. Benson, note to ll. 902-19: The May garden was a conventional setting for courtly love.
- 7) *Ibid.*, note to ll. 989-98: Dorigen's promise, a version of a folklore motif called the "rash promise," is also the imposing of an impossible task since she clearly intends it as a refusal.
- 8) "compassioun," MED2. (a) : Sympathy, compassion (初例1340年).
- 9) "illusioun," MED2. (a) : Deception (usually of the senses or imagination); an act of deception; the fact of being deceived (初例 FranT l. 1264引例)
- 10) cf. "the definition of the Franklin's Tale as a Breton lai helps to disarm criticism by associating it with a form where magic is commonplace and where the characters frequently act by an ethic oblique to the norms of Christianity." (Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer: The Canterbury Tales* [Oxford: Oxford U.P., 1989], p.232)